[演題2]

人体解剖見学実習に対する学生の意識調査と課題

小形 晶子¹⁾, 森本 達次²⁾, 大久保 吏司¹⁾, 大瀧 誠³⁾, 中前 智通³⁾, 栢原 哲郎³⁾

1) 神戸学院大学総合リハビリテーション学部理学療法学科

2) 順心リハビリテーション病院リハビリテーション科

3) 神戸学院大学総合リハビリテーション学部作業療法学科

1. はじめに

神戸学院大学総合リハビリテーション学科理学療法学科・作業療法学科の第2セメスター科目の「解剖学実習」では、授業の一環として人体解剖見学実習（以後、「見学実習」とする）を行っている。見学実習実施後に学生が提出した感想文（自由記述）の分析を行い、見学実習に対する学生の意識について検討を行ったので報告する。

2. 対象と方法

2012年度から2016年度の5年間に行った見学実習について、実習終了後に学生が提出した感想文を対象とした。感想文は400字以上の自由記述としており、内容や量についての制限は設けていない。感想文中に頻回に登場する言葉、文章の抽出を行い、その意味するところを「項目」として設定した。次に、全感想文について、その「項目」に該当する部分を抽出し、その数を算出し、全感想文中に対する割合に換算した。

3. 結果と考察

各項目の割合は、「解剖記述、考察」(70.8%)、「見学実習という機会への感謝」(49.3%)、「教科書と実際との違いに気がついた」(45.7%)、「解剖学の必要性」(44.1%)、「献体して下さった方への感謝」(33.1%)、「実際に見た驚き」

(31.1%)、「向上心（もっと勉強しないとイケないと思った）」(30.9%)、「今後活かしていきたい」(28.2%)、「戸惑い」(25.6%)、「勉強不足への自覚」(23.7%)、「解剖への興味が増した」(12.0%)、「医療職としての自覚」(11.6%)、「恐怖心」(9.1%)、「教員への感謝」(8.6%)、「教員とのかかわり」(8.0%)、「時間が足りない」(7.1%)、「観察できなくて残念だった」(5.1%)であった。

現在、見学実習は、1時間30分程度の実習を1回もしくは2回行っているが、限られた時間と環境の中で、多くの学生が解剖学の重要性や、実際に見ることではわからないことがあるということ、専門職としての自覚、倫理感などを感じ取っていることが今回の分析で分かった。これらのことは、教員側が見学実習で学生に伝えたいと日頃より考えている事項であり、見学実習に対する課題設定は妥当であると思われる。しかしながら、「戸惑い」「恐怖心」等を感じる学生もいることから、見学実習前のオリエンテーションの内容や、見学実習の実施様式については更なる検討が必要であると考え。また、見学実習の時間・環境についても、学生が十分に準備し、落ち着いて実習に臨めるような設定が必要であると考え。